

『吾輩は猫である』口髭

Junko Higasa 2016.5.21

漱石は決して旧態固執者ではない。西洋化に警告を發したといえども、西洋嫌いではない。倫敦に留学して西洋の優れた部分に気付くと同時に、東洋の良さも認識したのである。それゆえ西洋風個性主張ではなく、東洋風個性許容を推奨するのである。自ら「変人」と称して自己の個性を鏡に映してよく知っていた漱石は、個性を封じろと言っているのではなく、個性の暴走を戒め、人間性向上を促している。

第五章にあるように、神が同じ材料で人間を造っておきながら、その顔を同じに作らなかったということは、千差万別の個性を作ったことになる。そのように人間は元々個性の生き物である。しかしいくら個性の生き物とはいえ、全てがバラバラの方向を向いては国の発展は望めない。そこで国を見目麗しく確たる形に保とうと思えば統一が必要になる。その明治の政策を表しているのが第九章の髭である。

人間は髭に例えられる。「いくら個人主義が流行る世の中でも、こう町々に我儘を尽くされては国(教師)の迷惑もさこそと思いやられる」そこで「国民(生徒)に向かって鞭撻を加える」「十把ひとからげに上のほうへ引っ張られては国民(生徒)もさぞかし難儀であろう」「時々は国(教師)も痛い思いをするが、そこが訓練である。否でも応でもさかに扱き上げる」括弧書きしたように、教師の仕事は国の政策と同意義である。但し教師の訓練(学問)は人間性向上にも役立つ。